

1. 開催概要

展覧会名	ラファエロ	
開催施設名	会期	入場者数
国立西洋美術館	平成 25 年 3 月 2 日～25 年 6 月 2 日	513,626 人 (開会式・内覧会等含む)
<p>●開催概要</p> <p>本展は、イタリア・ルネサンスの巨匠の一人、ラファエロ・サンツィオ（1483－1520）の画業を、日本で初めて本格的に紹介する展覧会として企画された。イタリアのフィレンツェ文化財・美術館特別監督局の協力を得て、同国内はもとより、ルーヴル美術館（フランス）、プラド美術館（スペイン）など計 7 か国 25 か所から作品を借用することが可能となった。ラファエロの油彩、素描など 23 点に、同時代の作家の油彩、素描、版画、工芸などを加えた計 61 点を 4 章に分けて構成し、ラファエロの業績と彼が後世へ与えた影響を明らかにした。</p> <p>高階秀爾氏（美術評論家、大原美術館館長）が「20 点あまりのラファエロ作品がまとめて紹介されるのは、日本において初めてであり、おそらく今後二度とは望めない。得がたい機会」（3 月 13 日付、毎日新聞）と評したほか、ラファエロ研究の第一人者であるトム・ヘンリー氏（英国立ケント大学教授）も「初期から没後まで全容を明らかにした見事な展覧会」（3 月 29 日付、読売新聞）とコメントするなど、国内外の専門家から高い評価を得た。また、会場内で一般来場者を対象に実施した記述式アンケートでも「何点ものラファエロがこのように日本でみられる日が来るとは思わなかった」「これ程までにラファエロがそろった展覧会を海外でなく日本でみられた事が大変良かった」など好意的な感想が多く見られた。</p> <p>偶然にも同時期に同じ上野公園内で「レオナルド・ダ・ヴィンチ展」が開催され、イタリア・ルネサンスに対する関心が相乗的に高まったことや、上述のような好意的な報道や評判が広がったためか、入場者数は会期終盤に増加し、513,626 人にのぼった。</p>		

2. 補償制度の活用による国民的利益に関する取組結果

以下のとおり国民的利益の還元積極的に取り組んだ。

(1) 展示作品の質・量の充実

ルーヴル美術館、プラド美術館からの出品作品は、いずれもラファエロの代表作であるため保険評価額が高額であり、本補償制度の適用を受けたことで借用が可能となった。ルーヴル美術館からは初期と晩年の傑作、またプラド美術館からは聖母子像の傑作を借用できたことで、「初期から晩年まで」の画業を網羅することができ、また、「聖母子の画家」とも呼ばれたラファエロの特徴を、質量ともに高いレベルで来場者に提示することが可能となった。

(2) 教育普及活動の充実

ラファエロに関する理解をより深めてもらうため、国内外の専門家を招聘し、以下のとおり講演会を開催した。いずれも満席（140人）となり、好評だった。

3月2日（土）14:00～16:00「ラファエローイタリアの宮廷に輝いた芸術」

クリスティーナ・アチディーニ（フィレンツェ文化財・美術館特別監督局長官）

3月9日（土）14:00～15:30「ラファエロ作《友人のいる自画像》の新解釈」

トム・ヘンリー（ケント大学教授）

4月6日（土）14:00～15:30「若きラファエロ：ウルビーノからフィレンツェへ」

伊藤拓真（恵泉女学園大学助教）

4月20日（土）14:00～15:30「フィレンツェのラファエロ」

渡辺晋輔（国立西洋美術館主任研究員）

5月11日（土）14:00～15:30「“ローマの画家”ラファエロ」

石鍋真澄（成城大学教授）

5月18日（土）14:00～15:30

「美術史への経済学的アプローチラファエロとパトロンたち」

ジョナサン・ネルソン

（ハーバード大学ルネサンス研究センター、ヴィラ・イ・タッティ研究員）

また、小・中学生の作品鑑賞の手助けとなる小冊子「ジュニア・パスポート」を作成・配布するなど、より深い鑑賞ができるような工夫を凝らした。

(3) 入場料の無料化

すでに実施している中学生以下の入場料無料措置に加え、3月22日（金）～4月7日（土）の15日間は高校生の入場料を無料にした。チラシなどによる積極的な告知の効果もあり、無料期間中の高校生入場者は3,742人（当初見込み1,400人）にものぼり、次世代を担う若者に対して美術鑑賞の機会を広く提供することができた。

(4) 鑑賞環境の維持と鑑賞機会の拡大

会期中、会場内が混雑したため入場規制を行わざるを得ない状況がしばしば生じた。主催者間で協議した結果、美術品補償制度が適用された展覧会として、「広く国民にすぐれ

た美術品鑑賞の機会を提供する」という制度趣旨を鑑み、会期末の7日間は開館時間を20:00まで延長することで(通常は17:30まで)、適度な鑑賞環境を維持しつつ、鑑賞の機会を拡大して提供することとした。誘導・警備スタッフの増員、開館時間延長のPR、混雑状況に関する情報提供(ハローダイヤルや展覧会ホームページでの速報)などの諸策をあわせて講じた結果、特に混乱もなく、7日間で計約8.5万人(1日あたり約1.2万人)の入場者があり、広く国民に鑑賞のより良質な機会を提供することができた。

3. 事故の有無(軽微な事故、ヒヤリハット事例も含む)

ヒヤリハット事例も含め、事故はまったくなかった。

4. 安全配慮に関する特別の対応

所蔵者や関係者と十分に協議し、陸送時の警察または民間警備車による警護を含め、万全の体制で輸送・展示作業にあたった。

また、入場者数の増加に対応して迅速に誘導スタッフを増員し、過度な混雑が展示室内外で生じないように誘導を工夫したほか、通常よりも強度の高い結界に交換するなど、作品と入場者の安全確保に努めた。

5. 紹介事例・今後の改善点等

本制度の適用によって、国際的に作品借用が困難とされるラファエロの代表作を借用し、ヨーロッパ以外で初めて本格的な「ラファエロ展」を開催することができたことは、「広く国民にすぐれた美術品鑑賞の機会を提供する」という本制度の趣旨に合致したものであったと自負する。

本制度の適用については、チラシや展覧会ホームページで広く告知したほか、展覧会会場入口、会場内配布の作品リスト上にも記載することで、来場者に対して制度の適用を強くアピールした。また、会場内に設置した来場者対象のアンケートにおいて「本展に美術品補償制度が適用されているのを知っていますか」という質問を設け、制度の適用に関する認知を促した(回答総数359人のうち69人=約20%が「はい」と回答)。

また、本制度の趣旨を全うすべく、会期中の入場者数推移から判断して、会期終盤の7日間は急遽、開館時間を20:00まで延長し(通常は17:30)、鑑賞環境の維持と鑑賞機会の拡大を図った。建物の構造上、入場待機列が屋外に延びてしまうため、待機エリアにはテントを設置し、待機環境を改善することにも努めた。開館時間延長のPRや誘導・警備スタッフの増員、混雑状況に関する情報提供などの諸策を講じた結果、事故はもちろんのこと、大きな混乱やクレームもなく無事に閉幕することができた。

6. 展覧会の収支決算書

国立西洋美術館、読売新聞社

●収入

●支出

内 訳	決算額 (当初予算額)	内 訳	決算額 (当初予算額)
展覧会収入・その他の収入	860,426,460	企画準備等基本経費	395,124,897
共催者負担	799,907	設営・運営等会場関係費	466,101,470
収入総額	861,226,367	支出総額	861,226,367